

福岡県で見いだされた緑化樹の病害 (続のVI)

福岡県林業試験場 小河 誠司

1. はじめに

福岡県で新たに見いだされた樹木の病害は、その都度報告してきた。1983年以前のものは、筆者¹⁾がまとめているので、ここでは1984年～1989年にかけて確認した病害について報告する。本報告の一部は、昭和60年～平成元年度の福岡県林業試験場業務成績報告書に記載されている。

2. シャシャンボの炭そ病 (*Colletotrichum gloeosporioides*) 新称

(1) 病徴：葉縁部や葉先に褐色の不整円斑を生ずる。病状の進んだ病患部は、変形して葉枯症状を呈する。葉裏の病斑は淡褐色である。病斑表裏両面には、中央部が裂開した縦長の小隆起物(分生子層)が多数生ずる。湿潤な時には、隆起物から乳色～肌色をした粘塊(分生子塊)を噴出する。

(2) 病原菌：分生子層は表皮下に生じ、のちに表皮を破って裂開する。大きさは70～110 μm ×30～60 μm である。分生子柄は単細胞で短い。分生子は楕円形で両端が円く、無色、単細胞、大きさ12.5～17.5 μm ×3.8～5 μm 。また、淡褐色、1～2隔膜、先端が尖った棒状で大きさ30～50 μm ×2.5～3 μm の剛毛を有する。

(3) ノート：本病は、1988年6月に遠賀郡岡垣町黒山国有林で見いだされたものである。シャシャンボ (*Vaccinium bracteatum*) には、*Colletotrichum* 属菌の記載は無い。ツツジ科 (*Ericaceae*) には、ツツジ類 (*Rhododendron*) に *Gloeosporium rhododendri* (分類学的には再検討を要すると日本植物病名目録に記載) とシャクナゲ類に *C. gloeosporioides* が記載されている。小林²⁾は屋久島で採集したヤクシマシャクナゲ (*R. metternichii* var. *yakushmanum*) 上の炭そ病菌を *C. gloeosporioides* と同定し、分生子の大きさを14～20 μm ×4～5.5 μm と記載しているが、病原菌の図には剛毛が無い。しかし、山本³⁾によれば、剛毛は寄主や環境によって欠けることがある。また、山本³⁾の炭そ病菌の種類と検索をみ

ると分生子の形と大きさから、本菌は *C. gloeosporioides* に一致する。これらのことから、本菌を *Colletotrichum gloeosporioides* と同定する。なお、シャシャンボは本病原菌の新寄主である。

3. キハダのさめ肌胴枯病 (*Botryosphaeria* sp.) 新称

(1) 病徴：枝および主幹部が侵され、節を境に赤褐変枯死することが多い。赤褐色部は、中央が裂開し、数個の孔口を有する黒色の隆起物が多数生じてさめ肌状を呈する。

(2) 病原菌：子座は表皮下に作られ、後に表皮を破って露出し、大きさ0.4～0.8mm、1～数個の子のう室を並列して形成、乳頭状隆起をもって開口する。

子のう室は、偏平なフラスコ状で、大きさは幅220～270 μm 、高さ170～240 μm である。子のうは棍棒状で無色、二重膜を有し、大きさ75～138 μm ×8～20 μm で、8個の子のう胞子を内蔵する。子のう胞子は無色、単細胞、楕円形または腹部がやや膨らんだひし形で、大きさは20～25 μm ×6.3～8.8 μm である。

(3) ノート：本病は、1989年5月に八女郡矢部村で見いだされたもので、筆者²⁾が *Guignardia* sp. による枝枯症として報告しているが、子座の発達がよく、1子座内に1～数個の子のう室が形成されていることから、*Botryosphaeria* 属とするのが妥当と考え、前報を訂正する。

小林⁴⁾によれば、*Botryosphaeria* 属菌は5つのグループに分けられる。本菌は、子のう胞子の大きさから、*B. dothidea*, *B. berengeriana*, *B. ribis* の群に入るものと考えられるが、種の同定は不完全世代を確認後行いたい。ここでは、*Botryosphaeria* 属菌によるキハダの枝、幹枯れの病名をさめ肌胴枯病 (新称) とすることを提唱する。またキハダには、この他に *Phomopsis* 属菌による枝枯症が認められる。症状はさめ肌胴枯病に類似するが小枝部に多い。筆者²⁾が記載したこの *Phomopsis* 属菌には、 α 胞子を記載していなかったため、再度各部の大きさを

ここに記載する。柄子殻は幅45~60 μm 、高さ30~35 μm 、分生子柄は7.5~12.5 μm ×2 μm 、 α 胞子は7.5~10 μm ×1.8~2.5 μm 、 β 胞子は20~30 μm ×1.5~2.5 μm の大きさである。

4. タラノキの枝枯病(*Phomopsis* sp.)新称

(1) 病徴：幹及び地際部がセンノキカミキリ (*Acalolepta luxuriosa*) に加害された株に多く発生する。梢や枝の先端から枯れ始め途中の節まで枯れ下がる。枯死部には、一面に中央部が裂開した小隆起物(柄子殻)を多数生ずる。湿潤時には、隆起物中央部から巻きひげ状の粘質物(胞子角)を噴出する。

(2) 病原菌：柄子殻は表皮下に生じ、のちに表皮を破って頂部を露出する。扁平で中央部が凹んだフラスコ状で、大きさは370~480 μm ×250~400 μm である。分生子柄は無色、単細胞で、大きさ10~12.5 μm ×2~2.5 μm 。柄胞子には、無色、単細胞、楕円形で、大きさ7.5~11.5 μm ×2~2.5 μm の α 胞子と、無色、単細胞、釣り針状で、大きさ17.5~27.5 μm ×2 μm の β 胞子がある。

(3) ノート：本病は、1988年6月に粕屋郡新宮町相ノ島で栽培されていたトゲナシタラノキ (*Aralia elata* var. *canescens*) で見出したものである。

タラノキ (*A. elata*) には、*Phomopsis* 属菌の記載はない。また、ウコギ科 (*Araliaceae*) の各属にも、*Phomopsis* 属菌の記載はない。種の同定は、完全世代が見いだされた後に行いたい。

5. おわりに

筆者²⁾ は、オオバクロモジの枝枯症の病原菌を、*Guignardia* 属菌として記載しているが、子座の発達と子座内に1~数個の子のう室を生ずることから、本菌は *Botryosphaeria* 属菌とするのが妥当と考えられる。そこで、前報告をオオバクロモジの *Botryosphaeria* 属菌による枝枯症と訂正する。

引用文献

- (1) 小河誠司：福岡県林試時報，31，1~34，1984
- (2) ————：福岡県林試業務成績報告書，平成元年度，48，1990
- (3) 小林享夫：林試研報，292，5~6，1977
- (4) ————：今月の農業，昭和63年8月号，1~11，化学工業日報社，1988
- (5) 山本和太郎：植物防疫，14(2)，1~4，1960

表-1 福岡県で新たに見いだされた樹木の病害 (1984~1989年)

寄主名	病名 (病原菌名)	病患部
イヌマキ	<i>Macrophoma</i> sp. ^{a)}	枝・幹
スギ	キトスポラ胴枯病	枝・幹
	フォマ葉枯病	葉
	白点病	葉
ヒノキ	樹脂胴枯病	枝・幹
	胴枯病	
	<i>Phomopsis</i> sp. ^{a)}	枝
	<i>Macrophoma</i> sp. ^{b)}	枝
コナラ	円星病	葉
アキニレ	黒斑病	葉
ミツバアケビ	とうそう病	葉
シキミ	炭そ病	葉
オオバクロモジ	<i>Botryosphaeria</i> sp. ^{a)}	枝
ビヨウヤナギ	<i>Mycosphaerella</i> sp. ^{a)}	葉
	<i>Phyllosticta</i> sp. ^{a)}	葉
シジミバナ	すすかび病 ^{c)}	葉
シモツケ	うどんこ病	葉
ザイフリボク	ごま色斑点病	葉
カリン	赤星病	葉
オウトウ	幼果菌核病	葉・実・新梢
ヤマハギ	さび病	葉
キハダ	さび病	葉
	<i>Botryosphaeria</i> sp. ^{a)}	枝・幹
	<i>Phomopsis</i> sp. ^{a)}	枝・幹
イヌウメモドキ	黒紋病	葉
ナナメノキ	黒紋病	葉
タラノキ	そうか病	葉・枝・葉柄
	<i>Phomopsis</i> sp. ^{a)}	枝・幹
セイヨウシャクナゲ	<i>Botryosphaeria</i> sp. ^{a)}	枝
シャシャンボ	<i>Colletotrichum</i> sp. ^{a)}	葉
カルミア	<i>Pestalotia</i> sp. ^{a)}	葉
チシャノキ	さび病	葉

a) 病名のないもの。 b) 徳重陽山・川辺祐嗣・村本正博：日林九支研論集，31，1978。 c) 小河誠司：日林九支研論集41，1988。 d) 他は日本有用植物病名目録による。